

10秒間の inflation-deflation を繰り返していくと、攣縮血管は拡張し容易に M2 まで balloon を進めることができた。この方法で両側の C1 から M2 まで拡張を行った。意識は約 12 時間後より 2～3 に改善し、麻痺も消失した。追跡血管写は、翌日、1 週間後、1 カ月後に施行したが、拡張部分の再狭窄は起こらず、ACA 領域の攣縮は一時進行したものの、MCA からの側副血行の増加が認められ、最終的には術前の状態に回復した。CT でも新たな LDA は出現しなかった。

〔考察〕本法は血管攣縮に対する有力な治療法になりうると考えられた。

119) 破裂脳動脈瘤早期再破裂の検討

—来院前再破裂、来院後再破裂について—

森井 研・高浜 秀俊 (山形県立中央病院)
佐藤 光弥・関口賢太郎 (脳神経外科)
佐藤 進

〔目的、方法〕早期再破裂は、破裂脳動脈瘤の予後に大きな影響を与えている。今回我々は、来院後再破裂に加え、来院前再破裂にも視点をあて、早期再破裂の実態につき検討した。対象は S55～61 症例中、6 時間以内搬入例 159 例である。

〔結果、考察〕159 例中 49 例 (30.9%) に再破裂あり、12 例で来院前再破裂、42 例で来院後再破裂がおきた。再破裂 49 例は、1 時間以内 12 例、3 時間以内 23 例、6 時間以内 35 例、12 時間以内 39 例と発症早期程多かった。12 例の来院前再破裂は、1 時間以内で 7 例、3 時間以内で 10 例あり、うち 5 例 (41.7%) で来院後、発症 12 時間以内の再々破裂がおきた。これは、来院前再破裂のなかった 147 例での来院後、発症 12 時間以内再破裂 27 例 (18.4%) に比べ高かった。血管写中の再破裂は、前回破裂から短時間施行例程多かったが、特に血管写前再破裂例に血管写中再破裂が多くおきていた。早期再破裂は、診察、CT 等非侵襲時にも同様におきていた。早期再破裂には外的因子以外に、時間的要素を含めた内的因子の関与が大きいと考えられる。患者取扱の際は、来院前再破裂の有無や時間経過に留意すべきである。

120) 未破裂動脈瘤の部位、大きさと Ruptured Risk

根本 正史・佐山 一郎 (秋田県立脳血管)
永島 雅文・安井 信之 (研究センター)

目的及び対象：一口に未破裂動脈瘤といっても、それが破裂にまで至るには、部位、大きさ、形態、血行動態、

全身合併症により様々と考えられる。今回、我々は、クモ膜下出血で発症した多発脳動脈瘤 148 症例を検討し、Ruptured Risk としての動脈瘤部位と大きさにつき考察した。

結果：1) 動脈瘤の部位/破裂動脈瘤は、未破裂動脈瘤に比較して、AC₀ 次いで MC 膝部の割合が多く、逆に MC の LSA 分岐部、IC-ACh に少なかった。2) 動脈瘤の大きさ/脳血管撮影上の最大径を S (<5mm) M (5<<10) L (10<) に分類すると、破裂動脈瘤では ICA 系 ACA 系で S が 15～20% と多く、未破裂動脈瘤では、MC の LSA 分岐部、MC 遠位部、IC-ACh、ACA 系で S が 70% 以上と多かった。一方、未破裂動脈瘤で IC-PC₀、MC 膝部に L が多く、AC₀ で少なかった。3) 未破裂動脈瘤を計 128 ケ平均 2 年間追跡し得たが、44 ケの M の動脈瘤のうち AC₀ 及び MC 膝部の動脈瘤が 1 ケずつ破裂した。74 ケの S、10 ケの L の動脈瘤に破裂したものはなかった。

結論：部位、大きさで、Ruptured Risk は異なる。

121) 短期間にクモ膜下出血を繰り返し増大あるいは新生した脳動脈瘤の 2 症例

清水 宏明・石橋 安彦 (大原綜合病院)
大原 宏夫 (脳神経外科)

最近我々は、脳血管写上短期間に脳動脈瘤の増大あるいは脳動脈瘤の新生を確認しえた 2 症例を経験した。

症例 1：42 才男性。頭部を強打して入院し、検査上クモ膜下出血及び左内頸動脈分岐部に 2×1.5mm 大の小さい動脈瘤様陰影を認めた。しかし、大きさ、形態から外傷性クモ膜下出血も否定できず、経過観察していたところ 10 日目に再出血をきたした。再度血管写にて同部位に 5×4mm と増大した動脈瘤を認め、根治術を行った。

症例 2：69 才女性。突然の頭痛、嘔吐、意識障害にて入院、検査上クモ膜下出血及び左中大脳動脈瘤を認めたが他の部位に所見はなかった。同部位の根治術を行い、経過は良好であったが、術後 14 日目にクモ膜下出血の再発を認めた。再度脳血管写にて、左中大脳動脈瘤とは別に、新たに 5×6mm 大の前交通動脈瘤を認め、根治術を行った。クモ膜下出血の原因の大部分は脳動脈瘤であるが出血後必ずしもすぐに脳動脈瘤が確認できず、診断治療に苦慮することがある。今回の 2 症例は短期間にクモ膜下出血をくりかえし、脳血管写上脳動脈瘤が増大ないし新生を示したことから興味ある症例と考え報告する。